

# 深イ～話!

No.11

全日本バレーボール協会名誉会長・松平康隆氏の「母の教え」より

私の母は娘盛りの16歳のときに、銭湯で細菌に感染し、一夜にして目が見えなくなってしまいました。その後、縁あって父と結婚し、私を産んだのが昭和5年。ご存知でしょうけれど、その前年の昭和4年に世界大恐慌がありました。今、100年に1度の大不況といわれていますが、こんなもんじゃない。あの時は、餓死者が出るほどの困窮の極みだったのです。

父は小さいながらも事業を営んでいましたが、父にもしものことがあれば、目の見えない自分と小さな息子が路頭に迷ってしまう。あの頃は社会保障なんてない時代でしたから、物乞いになるか、死ぬかのどちらかしかないわけです。

そこで、一念発起した母は、女性が仕事を持つことが考えられない時代に骨瓶こつがめを焼く会社を設立したんです。

鹿児島的女性でしたし、強い女性だったことは確かです。また、なんとしても生きていかなければという気概きがいがそうさせたのでしょう。

その母が私に繰り返し教えたことが3つありまして、まず1つが、「負けてたまるかと静かに自分に言いなさい」

簡単に言えば、克己心ですよ。人間はどんなに強そうに見える人にも弱い部分がある、その弱さとはナヨナヨしているというよりも、怠惰であったり、妥協であったり、みんな己に対する甘えを持っているわけです。

だから、常に自分自身を叱咤激励し、己に打ち克つことが人生では大切なことだと、そういう実感が障害とともに生きた母にはあったのでしょう。

この「負けてたまるか」は、監督になっても世界一を目指す私にとって、一番大切な言葉であり教えとなりました。

